

激動の経営

潮流に乗る

「二酸化炭素（CO₂）冷凍機は世界で主流の冷凍機になる」。日本熱源システム社長原田克彦は、自ら開発を主導した主力製品「CO₂冷凍機スーパ

「グリーン」の展開に自信を見せる。2015年の発売から現在まで150案件・450台以上を収めた実績がその裏付けだ。

東日本大震災の発生で陥った窮地の中で開発した同製品は、利用者からの評判も後押しして冷凍・冷蔵倉庫や冷凍食品工場を中心に販路を拡大。勢いを得た克彦は17年には同製品の専用工場（現滋賀工場3号館）を開設した。19年には省エネルギーセンターの「省エネ大賞」で中小企業庁

日本熱源システム ④

省エネ冷凍機に自信



原田克彦社長（左）と父の昌彦会長

長官賞を受賞するなど高い評価を得ている。23年4月には滋賀工場内に新棟を完成。生産能力を従来比3倍に引き上げ、化学・製薬業界にも手を広げる。

既存のフロンガス冷凍機に対し、スーパークリーンは環境負荷低減、脱炭素化という巨大な潮流に乗り、さらに高い省エネ性能が受け入れられ「受注が拡

東南ア展開 次の成長へ

大している」という。コロナ禍でも巣ごもり需要や電子商取引（EC）の発達で冷凍機の需要は衰えなかった。克彦は「来年の受注も固まりつつある」と期待を込める。

相棒に感謝

今後はマレーシア、フィリピン、シンガポール、タイなど東南アジア諸国をターゲットに海外でも展開する予定だ。また、アンモニア冷媒冷凍機「ブルーアストラム」と太陽光温水器を組み合わせた「熱利用」の総合ネットワーク構築など、成長に向け次々と矢を放

つ。

87年の創業から今年で37年目。売上高はここ20年で5倍に急拡大した。克彦は「GEA社やBOCK社が優れた技術を教えてくれたのが事業の礎」とパートナーへの感謝を忘れない。NHKの一線記者から畑違いの分野に飛び込んだ際は、社内人間関係に悩んだ。

それでも若手社員を中心に「一緒に頑張ろう」と声をかけては同志を増やしていった。それだけに人とのつながりへの思いは強く「頼りになる人は、いつも身近に」と気付けられる」と話す。

大きな目標

意見がぶつかることも多い、会長で父の昌彦も「NHKを洗々やめて来たはずなのに、ここまでよくやってくれた」と満足げだ。そんな父の気持ちを克彦も「おやじも最近認め始めてくれたかな」と受け止める。

「日本が自然冷媒冷凍機のトップランナーになる」。大きな目標に向け、日本熱源システムはますます熱帯を帯び始める。（敬称略）（この項おわり。宮城かれんが担当しました）